

妙光院の馬頭観音（ばとうかんのん） 神仙寺通1丁目



通称青谷の高台に位置する妙光院は天台宗の寺院で、動物愛護の寺として知られている。境内にある馬頭観音菩薩像は高さ6㍎あり、日本最大の馬頭観音であると言われている。普通、観音菩薩像はやさしい顔をしているが、馬頭観音だけは例外で、仏法をそしる者や現世で悪事を行なう者を正しい道に教化するために憤怒の顔をした観音になったという。妙光院の馬頭観音は、1930（昭和5）年に当時の住職が重い荷をひいて坂道で困っている馬を見て、まつることを発願し、1933（昭和8）年に建立したものである。動物守護の本尊で、火災を背負い走る馬の背に足を上げる姿は動物に災難が及ぶ時に救いに行く姿をうつしたものだ。

観音像の背後にある愛馬供養塔にはかつて競馬ファンの血を燃えさせた名馬テンポイントをはじめとし、キシウローレル、ハマノパレードなど多くの馬のタテガミが奉納されている。それらの命日には関東・中国などからもお参りに訪れ、りんごや千羽鶴を供えていくという。毎年1月18日に初馬頭観音祭が行なわれ、愛馬やペットの健康を祈る参拝客で賑わう。

場所：神戸市中央区神仙寺通1丁目2-10

●「神仙寺通（しんせんじどおり）」の由来

かつてこの地に滝勝寺の末寺の神仙寺があり、寺が廃寺になったあとも地名として残ったと言われる。

歓喜寺 中島通5丁目



1897（明治30）年、若林鉄心によって建てられた曹洞宗の寺院で山号を秋葉山（あきばさん）という。本尊の十一面観音像（頭上に十一の顔をいただいているところからこの名が付く）は1914（大正3）年に国の重要文化財に指定された藤原時代・一木造の秀作で、像高が88.4 cmある。この観音像は元周防国岩国の領主・吉川監物の念持仏であったと伝えられている。

この寺は第二次世界大戦で本堂や庫裏などが焼失したが、その際、本尊の十一面観音は多田神社に逃れていたため無事であった。終戦後、しばらく東福寺を間借りして寺の活動を続けていたが、一年後に元の場所に戻り、仮本堂を設置した。現在の本堂は1967（昭和42）年に復興されたものである。なお、本尊の十一面観音は一般には公開されていない。

また、阪神・淡路大震災の犠牲者を慰霊するため、境内に、震災三回忌にあたる1997年（平成9年1月15日）に「慕心（もしん）」と刻まれた遠藤泰弘デザインの慰霊碑が建立された。



国重要文化財
十一面観音像

※文化財の写真は著者提供（1994年撮影）

場所：中島通5丁目1-40

●「中島通（なかじまどおり）」の由来

もともこの地に「中島」という字名があり、それが町名になったといわれるが、一説にはこのあたりの耕地整備を請負ったのが中嶋組でそれにちなんだともいわれており、定説はない。

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

歓喜寺 中島通5丁目

●「籠池通（かごいけどおり）」の由来

水漏れの多い池のことを一般に「かご池」といい、農村時代に旧筒井村の灌漑用の池がこのあたりにあったが、その池の水漏れがひどかったことから名付けられたという。

●「野崎通（のざきどおり）」の由来

旧筒井村の上筒井に東野という高台があり、その先端を「野さき」と呼んでいたのが地名になったという。

●「坂口通（さかぐちどおり）」の由来

このあたりが摩耶山への登り口であり、また上筒井の高台の東野への上がり口でもあったことから、「坂口」と呼ぶようになったといわれている。

中尾大神宮神社 中尾町



旧中尾村の氏神。祭神は天照皇大神。この神社がいつ創建されたかは不詳である。1888（明治21）年に二宮神社に合祀されたが、1923（大正12）年に合祀を取り消し元に戻った。

場所：中尾町 10-20

●「中尾町（なかおちょう）」の由来

記紀に出てくる「活田長峡国（いくたながおのくに）」が転化したと言われる。なお、この地の豪族布敷首が滝勝寺の勢力から逃れるためにこの地に隠れてもとの長峡を中尾に書き改めたとも言われるが定かではない。さらに、布引の滝の東側には多くの山の尾が出ており、その真ん中の尾からきているという地形から名前が付いたとする説もある。

筒井八幡神社 宮本通3丁目

- 「筒井町（つついちょう）・上筒井通（かみつついでおり）・宮本通（みやもとどおり）」の由来



祭神は応神天皇で、旧筒井村の氏神。この神社の創建については不明であるが、宝物の金幣に「明德元年（1390）」の文字があるので、創立はそれ以前と思われる。なお、春日野道の名の起りになった春日神社は春日野墓地近くにあったが、今はこの筒井八幡に合祀されている。さて、この辺りが開ける前は、田園の中に一つ際立つ森として、この神社は街道を往来する人々の目印になっ

た。その付近には清水が古くから湧いている井戸があり、井筒が設けられ、それが村の名になったといい、境内には「筒の井」という井戸が残っている。また、神社のある宮本通の町名は筒井八幡神社の本地であるところから名付けられた。

阪神・淡路大震災で倒壊した正面の大鳥居も2000(平成12)年10月に再建され、その脚部裏側に「復興阪神淡路大震災」の文字が刻まれている。



つつの井

場所：宮本通3丁目1-5

- 「大日通（だいにちどおり）」の由来
かつて、滝勝寺の末寺であった大日寺があり、廃寺となったあとも、地名として残った。

熊内八幡神社 熊内町9丁目

●「熊内町（くもちちょう）・熊内橋通（くもちばしどおり）」の由来



旧熊内村の氏神で、応神天皇と彦火々出見尊（ひこほほでみのみこと）を祭神とする。この神社の創建についてはいくつかの説がある。文武天皇の時代、滝勝寺建立の時、寺の鎮守として創祀し、その時に祭神の一つ彦火々出見尊を祀ったという説や、後鳥羽上皇の時だという説もある。また、永禄年間にこの地の名族中西家の祖、加賀美（かがみ）二郎が創建したともいう。なお、荒

木村重が織田信長に反旗を翻し乱を起こしたとき（1579<天正7>年）、滝勝寺とこの神社が焼かれ、その後復興した。しかし、1889（明治22）年火災にあい、一時二宮神社に合祀されたが、1902（明治35）年に氏子の手で元の場所に再建された。

境内には、湊川の戦いで敗れた新田義貞が京へ逃げ帰る途中この地で鎧を脱いで休んだと伝えられる「新田義貞鎧かけの松」（現在は二代目の松になっている）や「悲秋碑」と言われる俳人・窓雨の「秋はけさ来にけり松のうしろより」の句碑（写真 a）、1957（昭和32）年に建てられた中西家の末裔・中西為子の歌碑「砂子山よぎりのはれてちぬの海のなみよりいつる月をみるかな」（写真 b）、そして、「左 住吉道 右 瀧」の道標（写真 c）がある。

また、境内にはかつて中西家にあった茶亭の一つ「香字庵」を偲んで建てられた六角堂があった。江戸幕末の中西家の当主は誉左衛門重之（前述の為子はこの重之の長女）といい、勤皇の志を抱いていたため、九州大村藩士の松林飯山や天誅組副総裁の松本奎堂などが彼の屋敷に出入りしていた。前記の「香字庵」は松林飯山の命名である。前述の「悲秋碑」は、一説によれば、1863（文久3）年の天誅組の変で自刃した松本奎堂を嘆き悲しみ、中西重之が読んだ句で、俳人窓雨は世をはばかった彼の変名だとする説もあるが定かではない。

阪神大震災で倒壊した正面の鳥居は2000（平成12）年4月に再建された。また、境内本殿西側には同月29日に建立された「震災の碑」があり、震災で倒壊した玉垣に刻まれていた氏子などの誌名が記されている。

ところで、「熊内」という地名の由来であるが、昔、神を「クマ」と読み、熊内とは神内という意味で、生田神社が砂山の上にあったときの神域からつけられたものと言われている。また、布引橋を戦前に熊内橋と呼んでいたため「熊内橋通」の町名がつけられた。

場所：熊内町9丁目2-18

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

熊内八幡神社 熊内町9丁目



(a) 悲秋碑



(b) 中西為子の歌碑



(b)道標

割塚古墳の跡 割塚通1丁目

●「割塚通（わりづかどおり）」の由来



布敷首霊地の碑

割塚は『摂津志』（並河誠所、1734<享保19>年）に和理塚として紹介されており、明治時代の『西摂大観』にもみられる。この古墳は古墳時代後期のもので横穴式石室の大円墳であった。この付近の言い伝えでは、豊臣秀吉の大坂城築城の際、大きな石材が必要なためこの古墳の石室の巨石が大部分運び出され、封土はその時壊され、わずかに二個ずつの大石と内部に落ち込んだ蓋石を残すのみとなり、これが割塚の名の由来になったという。現在の割塚通の地名はこの割塚古墳にちなんで名付けられた。

いつの頃からか封土の上に稲荷の社を祀り、割塚稲荷と称されていたが、1935（昭和10）年に行われた

阪急電鉄三宮乗り入れ工事の時にこの遺跡はつぶされてしまった。なお、それより前、1926（大正15）年に墳石を利用して、「布敷首之霊地」という碑が稲荷の祠の前に建てられ（現在はもとの位置から西南に20㍍の所に移されている）、碑の裏に和理塚は布敷首の墓であると説明がなされているが、この割塚が布敷首の墓であるという根拠は今の所どこにもない。

なお、この「布敷首之霊地」の碑の裏側に昭和37年に建立された「割塚古墳の跡」の碑がある。



割塚古墳の碑

HAT 神戸 脇浜海岸通



「HAT 神戸」とは東部新都心の愛称で、「HAT」は「Happy Active Town」の頭文字を組み合わせたもの。摩耶山の南、ウォーターフロントに開けるこの地域が、ハッと変貌し、誰もが幸福で、活気あふれる街となるように願いを込めて命名された。この HAT 神戸は、神戸市中央区東部から灘区西部にかけての臨海部における大規模工場の遊休化などに伴う土地利用転換を図る総合的な整備を目的としたもので、計画フレームは、地区面積・約 120ha、居住人口・約 30,000 人（全体約 10,000 戸）、就業人口・約 40,000 人、利用人口・約 150,000 人とし、1995(平成 7)年度から建設が始まった。

HAT 神戸全体 (120ha) のうち、阪神高速道路以南の臨海部地区 (約 75ha) については、土地区画整理事業により、緊急かつ大量の住宅供給や「WHO 神戸センター」をはじめとする都市機能の導入を図る道路等の基盤整備が進められ 2004 (平成 16) 年 3 月に完了した。

また、地域内には「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」や「兵庫県立美術館」なども設置されている。

● 「脇浜町 (わきのはまちょう)・脇浜海岸通 (わきのはまかいがんどおり)」の由来

今でも脇浜の東側の高台に敏馬 (みぬめ) 神社 (灘区岩屋中町 4) があるが、この神社のある高台を敏馬の崎といった。大輪田ノ泊が栄える前、奈良時代前期にはここ敏馬の浦が港として栄えていた。この敏馬の崎の脇にある浜というところから「脇浜」と名付けられた。

春日野道商店街・小野中道商店街跡



春日野道商店街
 戦前、旧葺合区域には春日野道商店街と小野中道商店街という二つの大きな商店街があった。今でも残る春日野道商店街は、その昔「西の新開地に、東の春日野道」とはやされたよき時代があったが、この商店街ができたのは大正年間である。一方、今はなき小野中道商店街は生田川の西、小野柄通と御幸通の間の道（今は大小のビルが林立する）にあった神戸市屈指の商店街で、明治の末頃に出来た。阪神と市電には含まれるという好条件も重なって、正午から夜の 10 時頃まで人通りが絶えなかったという。しかし、こうした小野中道商店街も 1945（昭和 20）年の空襲ですべてが焼かれ、戦後は復活の機会を失い、幻の商店街となってしまった。



小野中道商店街跡

● 「真砂通（まさごどおり）」の由来

真砂とは細かい砂のことで、かつてこのあたりは美しい細かな砂が広がっていた海岸であったところから名付けられたというが、定かではない。

● 「北本町通（きたほんまちどおり）・南本町通（みなみほんまちどおり）」の由来

両町の境を東西に走る道がかつての西国街道の浜街道で、その街道の北を北本町通、南を南本町通と名付けた。

● 「吾妻通（あづまどおり）」の由来

周辺の旭、雲井、東雲、八雲、日暮といった地名と照応させ、こうした地域の東部というところから付けられたという。一説にはこの地区の道路整備を吾妻組が担当したことから付けられたともいうが定かではない。

中村八幡神社 日暮通2丁目



旧中村の氏神で、祭神は応神天皇。縁起は定かではないが、言い伝えによれば、昔、筒井村と脇浜村の住人が対立していたとき、生田の里から両村の中間に移り住んだ長老が石清水八幡宮より勧請し、中の八幡宮と呼んだのが始まりと伝える。明治の中頃、一時二宮神社に合祀されたが、1932(昭和7)年に再び氏子の手でもとの地に戻している。戦後の社殿建立工事の時、地下

1.8 社のところから、礎石らしいものがみつかり祭器のかけらが出てきたという。

●「日暮通（ひぐれどおり）」の由来

鎌倉中期の天台座主・澄覚法親王が布引の滝を訪れて詠んだ「布引の滝見て今日の日は暮れぬ 一夜宿かせ峯の笹竹」の歌にちなんで付けられたという。また、旧生田村の字名に「ひぐら」があり、それに漢字をあてたとも言われている。

●「八雲通（やぐもどおり）」の由来

日暮通にある中村八幡の「八」と北の東雲通の「雲」をあわせて付けられた町名といわれるが、はっきりしたことはわからない。

●「東雲通（しのめどおり）」の由来

一説には、平安時代の貴族・藤原家隆の「みつか夜のまだ臥し慣れぬ芦の屋の つまもあらはに明る東雲」からとったといわれるが、定かではない。

●「旭通（あさひどおり）」の由来

鎌倉中期の貴族。西園寺実氏の「呉竹の夜の間の雨に洗ひほして 朝日に晒す布引の滝」からとったものだと言ったり、東隣の日暮通に対応して付けたものだと言ったりする。

●「雲井通（くもいどおり）」の由来

平安時代の藤原隆家の詠んだ「雲井よりつらぬき懸る白玉を 誰れ布引の滝といひけむ」の歌や、『栄華物語』滝の巻の皇太后宮太夫祐家の「めづらしや雲井遥に見ゆるかな よに流れたる布引の滝」と詠んだ歌にちなんで付けられたという。

賀川豊彦生誕 100 年記念の碑 小野柄通 1 丁目、生田川公園内



生協活動の父として知られる賀川豊彦の生誕 100 年を記念して、1989 (平成元) 年 4 月 22 日に建てられたモニュメントである。なお、この碑には賀川直筆の「死線を越えて 我は行く 豊彦」の銘がある。

賀川は 1888 (明治 21) 年に現在の兵庫区島上町で生まれ、貧しい幼年期を過ごした。1910 (明治 43) 年の暮れ、彼は葺合の新生田川地区に引っ越し、

キリスト教を熱心に信仰し、貧しい人々への献身的な奉仕を続けたのであった。1920 (大正 9) 年、彼の自伝小説『死線を越えて』が刊行され、ベストセラーとなった。そして、彼の指導で 1921 (大正 10) 年、神戸購買組合が誕生するが、これが現在では全国一の規模を誇る生協・コープこうべの前身である。また、同じ年、友愛会関西労働同盟会の理事長として、川崎・三菱での労働大争議の指導を行ない、警察に検挙されたこともある。関東大震災後は活動の場を東京に移し、1960 (昭和 35) 年に 71 歳の生涯を終えている。

なお、こうした賀川の業績をたたえ、彼の慈善事業を継承拡大するため、碑の建つ所から北東の位置、吾妻通 5 丁目に 1963 (昭和 38) 年、賀川記念館が建てられた。

● 「小野柄通 (おのえどおり)・小野浜町 (おのはまちょう)」の由来

かつて、このあたりは生田神社の近くに広がる野で「生田の小野」として知られていた。近世、生田の小野の海岸付近に新田が開かれ「小野新田」と呼ばれ、その浜を「小野浜」と呼ぶようになった。また、江戸幕末の歌人・賀茂季鷹の詠んだ「分け入りし生田の小野の柄もここに くちやはてむ布引の滝」歌にちなんで「小野柄」の名が付いたという。

● 「御幸通 (ごこうどおり)」の由来

生田神社が生田村から生田宮村へと社地を代えたので、生田村から生田宮村へ行く道を御幸通というようになったという。また、生田神社神官の後神 (ごこう) 氏が住んでいたからともいわれる。

小野八幡神社 八幡通4丁目

●「八幡通（はちまんどおり）」の由来



社伝によれば、887（仁和3）年の創祀。祭神は応神天皇で、旧小野新田村の氏神。言い伝えでは、源平合戦の一ノ谷の戦いの時、生田の森で戦死した源氏の河原太郎・次郎兄弟のために源頼朝が報恩寺を建て、その鎮守として建てられたのが小野八幡であるという。報恩寺はもと大丸の北にあったというが、その鎮守の宮がなぜこの地にあるのかはわからず、こうした言い伝えはどこまで真実かはわからない。なお、報恩寺があったとされているあたり、三宮神社（三宮町2丁目）の境内には、震災前、「従是河原兄弟塚」の碑や「河原霊社」が建っている。

神社の入り口両脇に、二本の折れた鳥居があるが、これは震災前にしめ縄をかけ渡す「しめ鳥居」の一部だったもので、震災で倒壊したため、1996（平成8）年秋に「甦れ神戸 復興祈願」の文字を刻んで震災の記念碑としたものである。

なお、この地域を八幡通というのは、小野八幡神社があることにちなむ。

●「磯上通（いそがみどおり）・磯辺通（いそべどおり）・浜辺通（はまべどおり）」の由来

浜に近いところから、磯や浜の字が付けられた。もとは小野新田村の区域であった。海に近いところを「浜辺」、山手を「磯上」、中間を「磯辺」と名付けたという。

二宮神社 二宮町3丁目

●「二宮町（にのみやちょう）」の由来



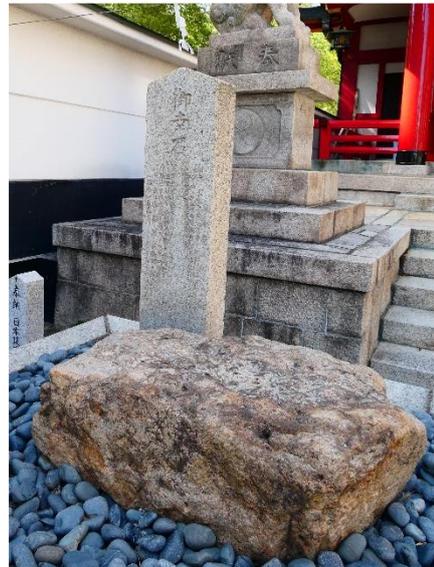
祭神は天忍穂耳尊（あめのおしほみのみこと）を主祭神とし、生田北向八幡大神を合祀。社伝によれば、生田神社が砂子山に祀られていた時、大水で流され、神主の刀弥七太夫（とねしちだゆう）が御神体を背負い、この地に難を避けた。そのため後に生田の裔神（えいしん）八社の一つをここに祀ったのが起源という。明治時代の中頃、筒井、熊内、中尾、生田、中村、脇浜、小野新田の七ヶ村の神社を合祀し総氏神としたが、後にもとに復した。ただ、生田村の八幡社だけは今日でも合祀されている。

また、境内には「御幸石（みゆきいし）」がある。これは刀弥七太夫が生田神社の御神体を背負って難を避けた際に、自分の家の庭石の上に一端安置したことから、この石を御幸石と名付け、後にこの神社の境内に置いたと伝えられるものである。

阪神大震災で落ちた正面の鳥居の石の島木と笠木の部分（鳥居の上部）は、従来より軽くするため鉄骨にスチールを巻いて石の吹き付け塗装を行って復興した。

なお、二宮町はこの神社があることにちなむ。

場所：神戸市中央区二宮町3丁目 1-12



御幸石

●「琴ノ緒町（ことのおちょう）」の由来

紀貫之が布引の滝を訪れた時に詠んだ歌「松の音を琴に調ぶる山風は 滝の糸をやすけて弾くらむ」と、旧生田村の字名「ことのお」を結びつけて町名にしたという。

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

旧生田川址の碑 加納町3丁目

●「加納町（かのうちょう）」の由来



旧生田川は布引から税関線を通り、加納町3丁目、市役所の前のフラワーロードを通り税関前のあたりで海に流れていた。むかし、この旧生田川は旧菟原（うはら）郡と八部（やたべ）郡の境界でもあり、古くから有名であった。

ところが、この川はしばしば水害を引き起こし、付近の人々を苦しめた。明治に入り、下流にある居留地が水害で被害にあったため、1871（明治4）年から4年がかりで現在の新生田川へと付け替えたのである。旧川敷は加納宗七に払い下げられ、彼はその土地約10万坪を市街地として、彼の名にちなみ加納町と名付けたのである。今、旧生田川の流れていたあと、加納町3丁目の交差点脇に「史蹟 旧生田川址」の石碑が建てられている。

付け替えられた現在の生田川は、かつて一時、暗渠（あんきょ）にしその上を公園にしていた時期があったが、1938（昭和13）年の阪神大水害で大きな被害を出したため、暗渠をやめ今のような形にした。今では、川沿いの生田川公園には多くの桜の木が植えられ、「ぬのびき花街道」の愛称で親しまれ、花見のシーズンには多くの市民でにぎわう。

場所：神戸市中央区加納町3-1

●「生田町（いくたちょう）」の由来

昔、生田神社が砂山にあったところからそのふもとを生田村というようになり、明治時代になり生田町となった（「生田」の由来については生田神社の項目を参照）。

●「若菜通（わかなどおり）」の由来

泉隆寺でふれた若菜がこの地でとれたことによる。かつてこのあたりは生田の若菜の里と呼ばれ、「若菜御料畑」があった。

旧生田川址の碑 加納町3丁目

●「国香通（くにかどおり）」の由来

鎌倉中期の天台座主・澄覚法親王の詠んだ「布引の滝津瀬かけて難波津や 梅か香おくる 春の浦風」の「梅か香」を採り町名にしたという。

●「神若通（かみわかどおり）」の由来

かつてこの地に滝勝寺の末寺の神若寺（しんじゃくじ）があったことから、寺が廃された後も地名として残った。ただし、読み方が後世、「しんじゃく」から「かみわか」にかわった。

●「旗塚通（はたづかどおり）」の由来

明治の頃まで6丁目から7丁目にかけて旗塚という古墳があったことから、それがそのまま町名となった。

砂子山（いさごやま）と徳光院 葺合町



砂子山は別名円山ともいわれ、この付近から弥生時代中期のものと思われる土器が多数発見された。いわゆる布引丸山遺跡である。大正年間より何度か遺物が出土し、それら出土した弥生式土器を故小林行雄博士は弥生時代中期のものとして鑑定し、それ以来神戸を代表する遺跡の一つとなっているが、正式な発掘調査が行なわれておらず詳細は不明である。また、この砂子山は生田神社が最初に祀られた場所だという。

砂子山の北側の麓に川崎造船所の創業者、川崎正蔵の墓所と川崎家建立の徳光院がある。徳光院は1906（明治39）年に川崎正蔵が建立したもので臨済宗天龍寺派の寺院である。本尊は鎌倉時代作と伝えられる十一面観世音菩薩。なお、境内にある多宝塔は1971（昭和46）年に国の重要文化財に指定されている。この多宝塔は、明王寺（垂水区名谷町）の境内にあったものを正蔵が1900（明治33）年に譲り受け、布引川崎邸に移築。1938（昭和13）年にここへ再移築した。この塔の木組の一部に「文明5年」（1473）の銘がある。また、多宝塔内に安置されている持国天・増長天の二像（いずれも平安時代作）は県の重要文化財に指定されており、その他塔内には薬師如来像（1476〈文明8〉年作）もある。

広大な境内にはその他、朱塗の山門（1907〈明治40〉年に播州より移築）、鐘楼（1631〈寛永8〉年に伽耶院〈三木市〉に建立されたものを1907年に移築）、弁天堂など多くの建造物や石造品がある。



国重要文化財 多宝塔

場所：神戸市中央区葺合町布引山 2-3

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

砂子山（いさごやま）と徳光院 葺合町

●「葺合町（ふきあいちょう）」の由来

中世、この地域に「葺屋荘」という荘園があった。一説ではこの地が葺屋と呼ばれる区域に入っていた時期があり、この「葺」がよく似た「葺」という字に誤写されたのではないかとされている。そして、葺屋は「吹き屋根」に通ずるので「葺合」に改められたというが定かではない。

布引の滝 葺合町

●「布引町（ぬのびきちょう）」の由来



布引の滝・雄滝

由来は別個のものだととらえているようである。

滝の水源は生田川の上流、摩耶山の奥で六甲山系の獺（かわうそ）池から出ており、滝の下流は生田川となって海に流れている。雄滝は高さ 43 ㍎、雌滝は高さ 19 ㍎ある。こうした滝には、昔から、そこに竜宮城の乙姫さまが住んでいたという言い伝えがある。雄滝の上に五つの水のえぐった横孔があき、水はこの孔に入っては出て、白い水玉を飛ばしながら雄滝を落下して行く。この孔は上から滝姫宮、白竜宮、白鬚宮、白滝宮、五滝宮と言われ、乙姫はこの竜宮城に住み、竜神となり海へ出かけ多くの船や船人を守ったという。布引の滝が白く見えるのは、この乙姫が着ている白い布がさらされているからだという言い伝えがある。

日光華巖の滝、紀州那智の滝とともに三大神滝と呼ばれ、古くから神秘的な伝説がつくられたりした。また、平安時代の昔から数多くの貴族や歌人がこの地を訪れ、古典文学作品などにもしばしば登場する。『伊勢物語』には、在原業平と兄の行平と目される公卿が滝見物をした様子が描かれ、『平治物語』には平清盛の滝見物の際に清盛に連れられて滝に来た家来の難波経房が悪源太源義平の雷に殺されるという話が載っており、さらに、『源平盛衰記』には清盛の長子重盛が滝見に来たとき、家来の難波経俊が滝壺に入り竜宮城を見て外に出たところを雷に打たれたという話が書かれてある。

・「雲居にさらす布引は、我朝第二の滝とかや。業平の中将のかの滝に、星か川辺の螢かと、浦路遙かに詠めけん、いづくなるらんおぼつかな。」（『源平盛衰記』）

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

布引の滝 葺合町

- ・「（後醍醐天皇は）布引の滝など御覧じやらるる…」（『増鏡』）

布引の滝は古来から名勝の地として知られ、現在でも神戸の名所のなかでは全国的に知られたものの一つである。滝は新神戸駅の北約 100m の所に雌滝が、その 200m上に雄滝が、その間に下から鼓ヶ滝、夫婦滝 があり、この四つを総称して「布引の滝」と呼んでいる。

「布引」の名前は、滝を落ちる水がまるで布を垂れているように見えたため付けられたものと言われている。生田川が現在の流れに付け替えられた時、旧生田川が埋め立てられ道と町になったが、道を「滝道」、町を「布引町」というようになった。ただ、大和政権時代にこのあたりを支配した豪族に「布敷首（ぬのしきのおびと）」の名が見られ、律令時代にはこのあたりを「布敷郷」と呼び、この布敷がなまって布引になったとする説があり、この考えからは地名の「布引」と滝の名前の「布引の滝」の由来は別個のものだととらえているようである。

滝の水源は生田川の上流、摩耶山の奥で六甲山系の瀬（かわうそ）池から出ており、滝の下流は生田川となって海に流れている。雄滝は高さ 43m、雌滝は高さ 19mある。こうした滝には、昔から、そこに竜宮城の乙姫さまが住んでいたという言い伝えがある。雄滝の上に五つの水のえぐった横孔があき、水はこの孔に入っては出て、白い水玉を飛ばしながら雄滝を落下して行く。この孔は上から滝姫宮、白竜宮、白鬚宮、白滝宮、五滝宮と言われ、乙姫はこの竜宮城に住み、竜神となり海へ出かけ多くの船や船人を守ったという。布引の滝が白く見えるのは、この乙姫が着ている白い布がさらされているからだという言い伝えがある。

日光華厳の滝、紀州那智の滝とともに三大神滝と呼ばれ、古くから神秘的な伝説がつくられたりした。また、平安時代の昔から数多くの貴族や歌人がこの地を訪れ、古典文学作品などにもしばしば登場する。『伊勢物語』には、在原業平と兄の行平と目される公卿が滝見物をした様子が描かれ、『平治物語』には平清盛の滝見物の際に清盛に連れられて滝に来た家来の難波経房が悪源太源義平の雷に殺されるという話が載っており、さらに、『源平盛衰記』には清盛の長子重盛が滝見に来たとき、家来の難波経俊が滝壺に入り竜宮城を見て外に出たところを雷に打たれたという話が書かれてある。

- ・「雲居にさらず布引は、我朝第二の滝とかや。業平の中将のかの滝に、星か川辺の螢かと、浦路遥かに詠めけん、いづくなるらんおぼつかな。」（『源平盛衰記』）

- ・「（後醍醐天皇は）布引の滝など御覧じやらるる…」（『増鏡』）

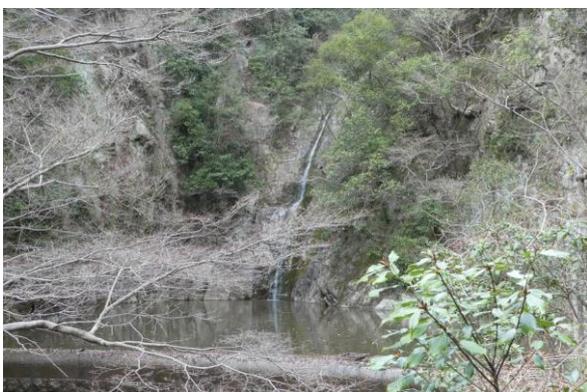
布引の滝 葺合町



夫婦滝



鼓ヶ滝



雌滝

北野天満神社 北野町3丁目

●「北野町（きたのちょう）」の由来



北野天満神社

異人館街の中、風見鶏の館の東隣にある鳥居をくぐり60段の石段を登ると北野天満神社の境内にでる。祭神は菅原道真で、旧北野村の氏神。この神社は、平清盛が神戸の福原に遷都したとき（1180<治承4>年）、京都の北野天満宮を勧請（かんじょう）して社殿を造営し、僧信海を別当においたと言われている。現在の本殿と拝殿は1742（寛保2）年

の建立である。なお、このあたり一帯を北野村（後の北野町）と呼んだのは、この北野天満神社があったからだと言う。



拝殿

場所：中央区北野町3-12-1

一宮（いちのみや）神社 山本通1丁目



祭神は田心姫命（たごりひめのみこと）で、生田裔神（えいしん）八社のうちの一宮といわれている。旧北野村の氏神。1690（元禄3）年の調書に「市の宮」とあり、この神社を中心に定期的に市が立っていたのではないかとされているが定かではない。現在の社殿は、1945（昭和20）年6月5日の空襲で焼失後、1955（昭和30）年に再建され、また1995（平成7）年の阪神・淡路大震災で全壊した社務所〔1950（昭和25）年再建〕は翌年8月に復興した。

末社に「伊久波神社」「熊高稲荷神社」が祀られて、2021（令和3）年4月に改修工事が竣工した。

場所：中央区山本通 1-3-5



● 「山本通（やまもとどおり）」の由来

山手の街づくりの完成から、山の方という意味で、「山本」と名付けられたという。

神戸ムスリムモスク 中山手通2丁目



1935（昭和10）年、日本ではじめて建てられたイスラム教寺院で、神戸ムスリムモスク（通称、神戸回教寺院）と呼ばれている。スンニ派に属すイスラム教寺院で、神戸に住むイスラム教徒の信仰の中心となっている。周辺の建物は第二次世界大戦でほとんど焼失してしまったが、この寺院だけは奇跡的に難を逃れた。



また阪神淡路大震災でも寺院は無事で、倒壊で家を失った近隣住民の避難場所として使われた。インドのイスラム様式といわれる建築で、中央のドームの上には三日月型の装飾があり、大小四基の尖塔が空にむかってそびえている。

場所：中央区中山手通 2-25-14

（見学自由。肌の露出が多い服装は控えるなど配慮が必要です）



第二次世界大戦で焦土と化した神戸
寺院だけは奇跡的に残った
1946（昭和21）年6月



阪神淡路大震災直後の寺院
1995（平成7）年

<過去の写真は、神戸ムスリムモスク提供>

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

神戸ムスリムモスク 中山手通2丁目

●「中山手通（なかやまでどおり）」「下山手通（しもやまでどおり）」の由来

明治のはじめ、山手新道が完成したときに、山手の町ということで名付けられ、北から上山手通、中山手通、下山手通となった。このうち、上山手通はのちに中山手通と山本通に編入されたため消えてしまった。

北向（きたむき）地藏 北長狭通1丁目



夜のネオンがまぶしい三宮・北野坂の一角にあるビルの北壁にお地藏さんが祀ってある。線香の絶えないこのお地藏さんは「北向地藏」と呼ばれており、次のような言い伝えがある。むかし、生田川がまだフラワーロードを流れていた頃、何日も降り続いた雨で生田川の水があふれてしまった。村人は必死で土嚢（どのおう）を積んだが、その土嚢も底をつき、疲れ果てた人々は小屋に帰ってしまった。その時、流木が土手にひっかかり、堤が切れそうになったが、誰も立ち上がれず、小屋のろうそくも消えてしまった。すると、堤の方で何かを引きずっては水に沈める音が聞こえてきた。翌朝、村人が起きてみると、流木がひっかかって堤が切れそう

になっているところに、大きな石が投げ込まれ土手が直されていた。そして、土手の上に見たこともないお地藏さんがやさしい顔でちょこんとすわっていたのである。村人はこのお地藏さんが堤を直してくれたと思い、川の西にお堂を建て、切れそうだった堤の方を向けて祭った。これが北向地藏のはじまりだと言われている。

場所：中央区北長狭通 1-20-12

◆郡界の碑（北長狭通1丁目、北向地藏隣）

北向地藏のそばに古い石柱が立っている。その石柱には「八部菟原 両郡界生田川」という文字が刻まれている。昔、旧生田川を境に菟原（うはら）郡と八部（やたべ）郡が分かれていた頃の名残である。もともとは旧生田川の堤防にあったが、いつの頃か北野川沿いに移され、その後、現在の位置に移ったのである。

●「北長狭通（きたながさどおり）」の由来

「活田長峡国（いくたながおのくに）」からとって「長峡通」となるところ、何かの手違いからか、「峡」がよく似た「狭」になってしまい「長狭通」になったという。そして、JR線の北にあるので「北長狭通」としたという。



郡界の碑

花熊城跡 花隈町

●「花隈町（はなくまちょう）」の由来



花隈公園のなかに「花隈城跡」という碑が建っている。この碑はもともと1928（昭和3）年に建てられたものだが、阪神・淡路大震災で倒壊したため、元の碑を忠実に模造し復旧したものである。碑の文字は岡山池田家当主の侯爵池田宣政によるものだ。この公園を中心にこのあたり一帯は神戸

を代表する近世城郭、花熊（隈）城があった場所である。花熊城の築城については、1568（永禄11）年に摂津国守護となった和田惟政が築いた説、1574（天正2）年に織田信長の命によって荒木摂津守村重（あらきせつのかみむらしげ）が毛利氏と石山本願寺の海上交通を遮断するために築いたという説があるが、後者の方が有力である。花熊（隈）の名は、神戸の海に面して突き出た台地、つまり「ハナクマ」からきている。

さて、この城の規模はと言えば、岡山大学所蔵の池田文庫「摂津花熊之城図」によれば、城を三つのブロックに分け、中央に本丸・二ノ丸・三ノ丸が、東部に侍屋敷と足軽町が、西部に町家が描かれている。そして、中央部の本丸には天守が備わっており、本丸と二ノ丸・三ノ丸をあわせた周囲には堀がめぐらされており、近世城郭の様相を呈していたのである。こうした城の構えを現在の地形にあてはめてみると、この花熊城は東は神戸生田中学の東の南北の道路、西は花隈町と下山手通8丁目の境の南北の道路、南はJRの高架線、北は兵庫県庁南の東西の筋で囲まれた範囲にあたると思われる。

ところで、この城の運命もそれほど長くはなかった。花熊城は荒木村重支配の下、家老の荒木志摩守元清が管理していたが、村重が織田信長に重大な嫌疑をかけられてしまうというハプニングがおこってしまったのである。これは村重の部下が、ひそかに当時信長と対立していた石山本願寺に物資を供給しているという疑いであった。いったん疑われると、信長の性格上それを覆すのは困難と考えた村重は、毛利氏に援軍を頼み、1578（天正6）年10月に信長に対してとうとう反旗を叛すに至ったのである。その時の様子が『信長公記』に記されており、天正6年霜月（11月）の末、信長が「滝川左近、惟住五郎左衛門兩人差遣され、……御敵荒木志摩守鼻熊に楯籠り候」とある。信長は最終的に池田信輝、輝政親子に花熊城攻撃を命じ、1580（天正8）年2月に城は陥落するのであった。落城後、信輝はこの城の材料の一部を使って兵庫城を築き、一部の石は大坂城を築くときに運ばれたという。

場所：神戸市中央区花隈町1 花隈公園内

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

諏訪（すわ）神社と諏訪山公園 諏訪山町

●「諏訪山町（すわやまちょう）」の由来



諏訪神社

諏訪山は標高 180m で、山に諏訪神社が祀られているところから名付けられた。諏訪神社は、諏訪明神（みょうじん）（健御名方大神<たけみみかたのおおかみ>・比売神<ひめかみ>）を祭神とし、社伝によれば、16 代天皇仁徳天皇の皇后・八田（やた）皇女の離宮鎮護の神として祀られたのが最初という。現在の社殿は 1924（大正 13）年に改築されたもの。このあたりはかつて、中宮村と称したが、これは諏訪神社が長田神社と生田神社の間に位置したとか、近くにある四宮神社が八宮の中宮だということから付けられたなど、諸説あるが、確かなことはわからない。いずれにしても、諏訪神社は旧中宮村の氏神であった。なお、「明和五年戊午正月元旦」（明和 5 年＝1769 年）の銘がある石の鳥居が、社殿正面階段下にある。また、俳人它谷の「紀の海の阿波へ流れる月夜かな」の句碑が社殿の横にあり、ここ諏訪山から南海の展望が素晴らしいことを伝えてくれている。

さて、諏訪山は江戸時代、中宮村はじめ四ヶ村の共有地であったが、後に官地となった。1873（明治 6）年には遊覧地となり、諏訪神社の境内 3000 坪を公園とした。公園の片隅に 1903（明治 36）年 6 月 7 日に建てられた「諏訪山遊園」の碑が、今でもそのことを偲ばせてくれている。また、山の麓にはイギリス人が発見した温泉（炭酸泉）が湧き、「諏訪山温泉」として親しまれ、「飲めば胃を治し、湯に浴すれば万病に効く」と伝えられた。さらに、1937（昭和 12）年この地に市立動物園を開園し、現在それは王子動物園に受け継がれている。諏訪山の動物園の跡地は現在、諏訪山「子供の園」として、児童公園になっている。

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

諏訪（すわ）神社と諏訪山公園 諏訪山町



諏訪山遊園の碑



子供の園（動物園跡跡）

◆金星観測記念碑、海軍営の碑（諏訪山町） E-18（67）

1874（明治7）年にこの地諏訪山で、ヤンセン率いるフランスの観測隊が金星の観測を行ったことを記念して建てられた石碑。この時、日本のマッチ工業の開発者清水誠がこの観測に従っているが、彼の名前はこの碑に刻まれている。諏訪山の展望台を金星台と呼ぶのはこの記念碑が建っているからである。すぐ北にある再度ドライブウェイの展望台にヴィーナス・ブリッジの名が付けられているが、このヴィーナス（Venus）とは金星のことである。

なお、この金星観測記念碑の山側に「海軍営」の碑がある。これは勝海舟が将軍家茂の神戸上陸を記念して建てたもので、もともと海軍操練所の地に建てられていたが、1915（大正4）年に現在の場所に移された。



金星観測記念碑

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

諏訪（すわ）神社と諏訪山公園 諏訪山町



它谷の句碑



海軍宮の碑

場所：神戸市中央区諏訪山町 5-1

大龍寺 神戸港地方口一里山再度山

●「再度筋町（ふたたびすじちょう）」の由来



大龍寺は再度山（ふたたびさん）の中腹にある真言宗の寺院で、山号を再度山という。本尊の木造菩薩立像（伝如意輪観音<によりんかんのん>）は国指定の重要文化財で、奈良時代の作、高さが1.8mあり、神戸市内最古の仏像といわれている。寺伝によれば、768年に和氣清麻呂（わけのきよまる）が創設し、当初は摩尼山といった。延暦年間（782～805年）に、弘法大師（空海）が唐に渡る際、旅の安全をこの寺の本尊に祈願した。その甲斐あって無事帰国することが出来、大同年間（806～809年）にその報告をするため再び登山し、この寺にやって来たので再度山の名が起こったという。なお、再度谷のことを蛇谷ともいい、これは弘法大師が唐に渡る時、船を守った大蛇が、大師が帰国後再び山に登った際にもこの谷に現われたのでその名が付いたといい、大龍寺という名はそのために付けられたと伝えられている。また、この寺は密教の影響を受けた、この地方を代表する山岳寺院でもある。庫裏の前には、松永貞徳の句碑「秋風にあんまとらせて苔の石」があり、境内から奥の院を経て、さらに山道を入ったところに「弘法大師の梵字（ぼんじ）石」や「亀の石」がある。

さて、再度山のこの寺のあるところ一帯は中世の山城、



国重要文化財木造菩薩立像
著者提供 1994年撮影

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

大龍寺 神戸港地方口一里山再度山

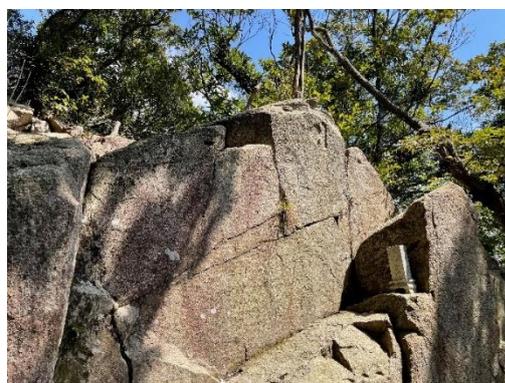
多々部城（たたべじょう）の跡である。建武年間（1334～1338年）に赤松則村が構築したというのが詳細は定かでない。なお、諏訪山の南、今の山本通4丁目付近は旧城ケ口（じょうがぐち）村であり、「城ケ口」という名は、この多々部城の大手になっていたことからその名が付いた。

ところで、この大龍寺の北、修法ケ原（しおがはら）を中心とする再度公園の中に「弘法大師修法之地（しゅうほうのち）」の碑がある。修法ケ原は、昔、大龍寺の僧侶が修法を行なったことからその名が付いたと言われている。

再度山のふもとに再度筋町という町名がつけられているが、ここから再度山へ向かう尾根づたいの道があったことから名付けられた。また、下山手通8丁目には「左 再山道」（ひだり ふたたびやまみち）の道標が残っている。



本堂



亀の石



松永貞徳句碑



弘法大師修法地の碑

● 「神戸港地方（こうべこうじかた）」の由来

「地方」とは町の周辺部のことを意味し、神戸港の周辺部ということから名付けられた。

三宮(さんのみや)神社

●「三宮町 (さんのみやちょう)」の由来



旧神戸村の氏神で、祭神は湍津姫命（たきつひめのみこと）。生田裔神（えいしん）八社のうちの一つであるが、創建年代は不明である。

三宮という地名はこの神社があることに由来する。

神社のすぐ南の東西に走る道が西国街道で、かつては深い木々におおわれ旅人の憩いの地となっていた。また、神戸開港後は、境内から湧き出る清水を神戸に

入港する船が汲んでいったという。なお、境内には源平合戦・一ノ谷の戦いの中、生田の森で戦死した源氏方の河原太郎・次郎兄弟を祀る「河原霊社」や「従是河原兄弟塚」の碑、神戸事件を伝える石碑が建っている。



河原霊社

場所：神戸市中央区三宮町2丁目4-4

◆神戸事件発生地石碑（三宮神社境内隅）

三宮神社境内南西隅に「史蹟 神戸事件発生地」の碑が建っている。三宮神社のすぐ南を西国街道が走り、それを隔てて南側一帯は外国人居留地であった。こうしたなか、江戸幕府滅亡直後に事件は起こった。1868（明治1）年1月11日のことである。その



日、西宮警備へ向うため備前藩の行列が西国街道を東へと行進していた。行列が三宮神社付近にさしかかった時、突然外国人が行列を横断しようとしたので無礼を怒った藩士がその外国人を傷つけたのがもとで当時港に停泊中の軍艦から外国兵が上陸し、交戦状態となり、外国兵は神戸を占領してしまった。世に言う「神戸事件」である。明治新政府は勅使東久世通禧（ひがしくせみちとみ）を派遣し、事件の解決にあたらせたが、結局、備前藩家老の日置帯刀が謹慎となり、備前藩士 滝善三郎正信は切腹処分となった。滝は2月9日、兵庫永福寺で外国人立ち会いのもと切腹し、事件は解決したのである。

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

旧外国人居留地

●「東町(ひがしまち)・伊藤町(いとうまち)・江戸町(えどまち)・京町(きょうまち)・浪花町(なにわまち)・播磨町(はりまちょう)・明石町(あかしまち)・西町(にしまち)・前町(まえまち)・海岸通(かいがんどおり)」の由来

市役所・東遊園地の西の筋から鯉川筋まで、三宮神社の南の筋(旧西国街道)より南側で囲まれた区域は、1867(慶応3)年から1899(明治32)年までの間、日本の統治支配が及ばない、外国人自治の行なわれていた外国人居留地であった。居留地は1858(安政5)年の日米修好通商条約の規定によって設置されることになり、神戸の居留地は神戸開港の半年前から幕府によって設営が開始された。幕府滅亡後は新政府が引き続きその設営を行ない、完工するに至ったのである。居留地は126に区画され、初代兵庫県知事 伊藤博文のもとイギリス人技師ハートが諸施設の設計にあたった。

今の東町、伊藤町、江戸町、京町、浪花町、播磨町、明石町、西町、前町、海岸通がかつての居留地にあたり、これらの町名は明治の初年に命名された。「伊藤」は県知事伊藤博文の名を、他の「江戸」「京」「浪花」「播磨」「明石」は日本の有名な地名や近隣の地名を町名に付け、「東」「西」「前」「海岸通」はそれぞれの位置から付けたものである。現在の居留地はビルが建ち並び、ビジネス街と化してしまっただが、旧居留地15番館(国重要文化財)は唯一残る居留地時代の建物である。なお、大丸前にある「神戸外国人居留地の碑」が当時の様子を偲ばせてくれる。

(豆知識) ストリートが今でも残る居留地の区画

日本の町と町の境界は普通、道路をその境にしている。しかし、この居留地内の町の境は例外である。町の大きな筋(道路)を中心にして対面する家々は同じ町名なのである。これは欧米のストリートという感覚がそのまま入ったもので、まさに外国人が住んでいた居留地ゆえのものといえよう。居留地の区画は現在でも残され、今でもストリート(筋)を中心にして町名が同じであるという光景はかわらずに残っているし、一番から一二六番までの区画も現行の地番として健在である。これもここがかつて居留地であったことを証明してくれる名残の一つであろう。



出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

旧外国人居留地

◆旧居留地に残る歴史の足跡

・居留地 1 2 4 番の標石(a)

モーリヤン・ハイマン商会の倉庫があった。
標石の埋め込まれてあるレンガ塀は 1919（大正 8）
年に修築したもの。

(a)



・居留地 1 0 8 番の銘板(b)

モーリヤン・ハイマン商会の倉庫があった。
明治初年に建てられたレンガ造りの建物の当
時の「窓まわり」に銘板をはめこんである

(b)



・居留地 1 0 3 番の標石(c)

ビルとビルの上にひっそりとたつ当時の標
石。イギリスの商社・ジョン・スワイヤ・アンド・サン
ズ・リミテッドの神戸支店があった。

(c)



・外国商館跡の門柱(d)

居留地 6 9 番にあった外国商館の門柱。

(d)



旧外国人居留地

・居留地 6 8 番の標石(e)

居留地 6 8 番に建っていた商館の門柱に使われた古い標石。



(e)

・神戸市立博物館(f)

1935（昭和 10）年に建てられた旧横浜正金銀行神戸支店の建物をもとに新たに建物を増築して、博物館に転用。博物館は市立考古館と市立南蛮美術館を統合する形で 1982（昭和 57）年にオープンした。建物は国の登録文化財になっている。



(f)

・チャータードビル(g)

居留地 9 番に建つ。1938（昭和 13）年築。この地は英・西・奥の領事館があったところ。



(g)

・神港ビル(h)

居留地 8 番に建つ。1939（昭和 14）年築。居留地時代はドイツの商社・シュルツライズ商会があった。



(h)

旧外国人居留地

・旧神戸居留地十五番館 (i)

1989（平成元）年に国の重要文化財に指定。神戸の居留地に残る当時の唯一の建物。コロニアルスタイル。1881（明治14）年頃に建てられたものと思われる。当時はアメリカ領事館として使用された。1990（平成2）年～1993（平成5）年にかけて行われた保存修理工事を経て、文化財を活用したレストランとしてオープンしたが、1995（平成7）年の阪神・淡路大震災で全壊した。震災後、倒壊前の部材を回収し復旧工事が行われ、1999（平成11）年に建設当初の姿を取り戻すことが出来るに至った。また、十五番館と西隣の16番の敷地との間にある煉瓦塀も居留地時代のもので、壁の端の柱の下には15番地と16番地の境界を示す線が引かれてある。十五番館前の「旧居留地下水道公開施設」は、1872（明治5）年頃に敷設された煉瓦造の下水渠で、居留地の設計を手がけたハートによって設計・施工された。



建物所有者：(株)ノザワ (i)

・宮城道雄生誕地の碑(j)

三井住友銀行神戸営業部の東側に、「春の海」で知られる箏曲家・宮城道雄生誕の地の碑がある。この碑のある場所は居留地58番（茶倉）にあたり、彼は1894（明治27）年4月7日にこの地で生まれた。幼少の頃失明するが、その後神戸の二代目中島検校に生田流箏曲を学び、上京後は新日本音楽の名で創作演奏をして活躍する。東京音楽学校教授となり、邦楽界の第一人者とまで言われるようになった。1956（昭和31）年演奏旅行中に列車から転落して死亡。なお、午前9時～午後5時までの30分おきに、代表作「春の海」の演奏がこの碑から流れる。



(j)

旧外国人居留地

- ・旧三菱銀行三宮支店時代の柱頭(k)

1929(昭和4)年に建てられた三菱銀行三宮支店(現・三菱UFJ銀行)の建物の当時の柱頭。なお、神戸支店のある神戸ダイヤモンドビルのエントランスホールの壁に埋め込まれている獅子のブロンズ扉は旧三宮支店正面玄関の扉である。



(k)



- ・居留地の碑 (l)

大丸前にある居留地の碑。



(l)

旧外国人居留地

・商船三井ビル (m)

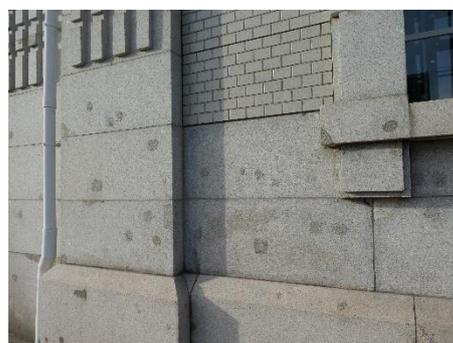
居留地 5 番に建つ。1922 (大正 11) 年築。居留地時代は独・露・スイスの領事館があった。



(m)

・海岸ビル(n)

居留地 3 番に建つ。1918 (大正 7) 年築で河合浩蔵の設計。このビルの西隣 2 番地に香港上海銀行のレンガ造りの建物が建てられていたが、これが第二次大戦中海軍武官府として使用されていたため、ここをグラマンが機銃掃射して、その名残が海岸ビルにも残されている。阪神・淡路大震災での被害が大きかったため、このビルは建て替えられることになったが、機銃掃射の跡が残る外壁部分はそのまま残して、その内側に近代的なビルを建てる (1998<平成 10>年竣工) ことで、かつての海岸ビルの名残を残している。



(n)

南京町（なんきんまち）元町通1丁目、栄町通1丁目一帯



神戸の中華街・南京町の歴史は、1868（明治元）年の神戸港開港直後と言われ、清国（当時の中国）が修好通商条約を結んでいなかったため、中国人は政府が定めた外国人居留地の西側（元町の南辺り）に集まって住むようになったのである。それが現在の南京町へと発展していったのである。今では中華料理店をはじめ多数の店舗が軒をつらね、神戸の観光スポットの一つになった。毎年旧暦にあわせて春節祭や中秋節などの行事が行われ、中国の伝統芸能を楽しむことができる。

●「元町通（もともちどおり）・元町高架通（もともちこうかどおり）」の由来

旧神戸村、ニツ茶屋村、走水（はしうど）村をあわせた旧神戸町の西国街道沿いの中心部で、元々の土地だということから名付けられたという。

●「栄町通（さかえまちどおり）」の由来

明治のはじめ、西国街道の南に広い道路をつけたが、それが完成したときによく栄える町にということで「栄町」と名付けた。

網屋吉兵衛顕彰碑 新港町



網屋吉兵衛（1785～1869）はニツ茶屋村に生まれ、1855（安政2）年に神戸村安永新田の地（新港第一突堤付近）に船たて場を築いた事で知られている。船たて場とは現在のドックに相当するもので、船底についた貝殻や船虫などを焼くための施設であった。後に、この船たて場の地は勝海舟の進言で幕府の海軍操練所となった。

なお、網屋吉兵衛の顕彰碑は新港第一突堤の付け根付近にあったが、現在はその北側の京橋のたもと付近に移設されている。

●「新港町（しんこうちょう）」の由来

新しい港ということから付けられたという。

メリケン波止場 波止場町

●「波止場町（はとばちょう）」の由来



メリケン波止場

中突堤の東隣、鯉川の河口に明治政府は 1868（明治元）年波止場を作り第三波止場とした（後に第二波止場となる）。いつの頃からかこの波止場をメリケン波止場と呼ぶようになったが、これは、この波止場ができる前の慶応 3（1867）年 11 月に、波止場のすぐ北側の区画にアメリカ領事館が開設されたことがその理由だと考えられる。当時、「アメリカ」のことを英語の発音から「メリケン」と聞き取り、アメリカを指す言葉として用いられたのである。そして、この波止場も、アメリカ領事館の前にある波止場ということで「メリケン波止場」と呼ぶようになり、正式名称である第二波止場（もとは第三波止場）の名が消えてしまった。ただ、第二次大戦中は、敵国の名称をさけたのか「万国波止場」と改称されたが、戦後、もとの「メリケン波止場」へと復帰している。

そのメリケン波止場大部分が埋め立てられ、1987（昭和 62）年にメリケンパークがオープンし、神戸海洋博物館が開館した。今でも、メリケンパークの東側の岸壁をメリケン波止場と呼びかつての名残をとどめている。

メリケン波止場の北側にあるメリケン地蔵は、はしけから転落して亡くなった子供や、港湾事故の犠牲者を弔うために 1975（昭和 50）年頃に作られ、このあたりから引き上げられた一石五輪塔とともに祀られている。

阪神・淡路大震災で、メリケン波止場はその岸壁が崩れ落ちたり、メリケンパークが液状化現象で泥まみれになるなど大きな被害がでた。この震災の傷跡を後世



メリケン地蔵

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

メリケン波止場 波止場町

にそのまま残そうと、1997（平成9）年7月、「神戸港震災メモリアルパーク」が開設された。ここには被災して半分海中へ崩れ落ちた岸壁を60年、当時のままで保存し、地震の激しさと被害の生々しさを伝えようとしている。

なお、波止場町はメリケン波止場があることから名付けられた。



神戸港震災メモリアルパーク

ポートアイランド

●「港島（みなとじま）・港島中町（みなとじまなかまち）・港島南町（みなとじまみなみまち）・神戸空港（こうべくうこう）」の由来

ポートアイランドは神戸港に浮かぶ新たな海上都市である。この神戸初の人工島は、外国貨物の増大と港湾輸送方式の変化、そして都市機能充実のための新都市空間を創るために建設がなされた。昭和 30 年代に原口忠次郎元神戸市長が構想を打ち出し、宮崎辰雄元神戸市長のもとでその構想も現実のものとなったのである。工事は 1966（昭和 41）年に着工され、1981（昭和 56）年に竣工するまで実に 15 年の歳月を要したビックプロジェクトであった。ポートアイランド埋立ての土砂は須磨高倉から運ばれたもので、8000 万㎡（霞ヶ関ビル 155 杯分）にも及んだ。なお、須磨高倉の土砂を採り切り開いた所は今、須磨ニュータウンとなり、多くの住宅が建ち並んでいる。このポートアイランドに限らず、山を切り開きその土砂で海を埋め立てるといふ、このユニークな神戸市の手法はかつてアメリカの雑誌に"Mountain goes to sea"（「山、海へ行く」）として紹介されたことがある。ところで、このような神戸の山を切り開いて海を埋め立てるといふ方法は何も現代に始まったわけではない。今から約 800 年前にこれと同じ事を行なおうとした人物がいた。それが平清盛である。清盛は兵庫津の前身、大輪田ノ泊を承安年間（1171～4 年）に改築し、その時塩樋山を切り開いて港に築島（経ヶ島）を築こうとしたのである。成功さえしなかったものの、今から 800 年前に今と同じような事をやろうとしていたのには驚嘆させられてしまう。

さて、ポートアイランドは総工費 5300 億円を要し、周囲 14 km、面積 436ha（甲子園球場の 120 倍）の島として 1981（昭和 56）年に完成したが、それより前 1972（昭和 47）年に旧生田区に編入されている。港島と三宮を完成と同じ年に営業を開始した新交通システム・ポートライナーが結んでいる。ポートアイランドの完成した 1981（昭和 56）年にはポートアイランドの完成を祝いポートピア'81 が開催され、多くの人々が会場に足を運び、新たな海上都市の門出を祝った。このポートピア博はその後各地で行なわれる地方博の先駆けとなったのである。

阪神・淡路大震災前は、11 のコンテナバースと 15 のライナーバースを有し、神戸港のコンテナ貨物の約 35% を取り扱っていた。現在では、コンテナ船の大型化に伴いコンテナバースの利用転換が必要となり、5 つのコンテナバースが再開発エリアとして新たな都市型ウォーターフロントに再生されようとしている。そして、中央部分には多くの高層住宅が建設され、今では人口約 1 万 5 千人を有する海上都市となっている。

また、1986（昭和 61）年から、ポートアイランドの沖合を埋め立てるといふポートアイランド二期工事（総面積 390ha）が行なわれている。ポートアイランド二期では、成長産業・集客産業の立地を目指し、医療産業都市構想、神戸国際マルチメディア文化都市（キメック）構想、神戸国際ビジネスセンター、上海・長江交易港区などのプロジェクトが進められようとしている。

さらに、ポートアイランド（二期）の沖合には、2006（平成 18）年 2 月 16 日に神戸空港が開港し、三宮とポートライナーの延伸線で結ばれることになった。地名も「神戸空港」となった。

なお、「港島」という地名は、ポートアイランドの直訳で、先に英語で島名をつけ、あとからその直訳を町名にしたものである。

湊川神社 多聞通3丁目

●「多聞通・橘通・楠町」の由来



この神社は湊川神社というよりむしろ、「楠公（なんこう）さん」という名で呼ばれ親しまれている。「楠公さん」とは南北朝動乱期の1336（延元元）年、湊川の戦いで戦死した楠木正成（くすのきまさしげ）のことで、そのほか一族17人と菊池武吉卿の霊を祀る神社であるが、創建は新しく、明治に入ってからである。この地は後醍醐天皇方の楠木正成が足利尊氏軍と戦った湊川の戦いの中心地であり、正成らが今はこれまでと自刃した場所でもあった。なお現在、本殿の西側奥に「史蹟 楠木正成戦歿（せんぼつ）地」の碑が建てられている。また、江戸時代に水戸藩主徳川光圀が楠木正成（大楠公）の墓碑「嗚呼忠臣楠子之墓（あちゅうしんなんしのはか）」を建立した地でもある。光圀の建てた大楠公墓碑には、幕末になると勤皇の志士たちが立ち寄り、尊皇の決意を新たにし、それ以後一般にも崇拜されるようになったという。

1864（元治元）年、鹿児島藩主後見役の島津久光が、大楠公の社を湊川のほとりに建てたいと進言し、また1867（慶応3）年には尾州藩主徳川慶勝（よしかつ）が、京都での建立を進言した。王政復古の号令で江戸幕府が滅亡し、明治維新政府となり、このあたりは兵庫鎮台をへて、兵庫裁判所の管轄下に入るようになった。その時、のちに初代兵庫県知事となる伊藤博文らが裁判所総督の東久世通禧（ひがしくせみちとみ）に対し、楠公墓碑の地に神号を賜わるよう計ってほしいと働きかけたのであった。そうした努力が実り、明治天皇の命で、1872（明治5）年に別格官幣社として湊川神社が創建されることになったのである。社殿の造営にあたっては、水戸家の徳川慶篤（よしあつ）が工事を水戸家で請け負いたいとの申し出もあったが、結局は一般の寄進によることとなった。社号については「楠神社」「大楠霊（おおくすたま）神社」という説もあったが、結局「湊川神社」で落ち着いたのである。1934（昭和9）年に社殿の大改築が行われたが、1945（昭和

湊川神社 多聞通3丁目

20)年の空襲で焼失してしまった。現在の本殿と拝殿は1952(昭和27)年に建てられたもので、当時としては神社建築にコンクリートを取り入れるという画期的なものであった。

なお、神社の所在地「多聞通」や周辺の「橘通」「楠町」はいずれも楠木正成にちなんで付けられた地名である。多聞は楠木正成の幼名・多聞丸(多聞)から、また、橘は楠木氏が橘姓を称していたことから付けられたものだった。

場所：神戸市中央区多聞通3丁目1-1

◆「楠木正成戦歿地」の碑(湊川神社境内)

湊川神社の本殿西側奥にある碑。

1336(延元元年)5月25日南北朝動乱期の中心的戦いである、湊川の戦いがこの付近一帯で戦われた。後醍醐天皇方の楠木正成軍はわずか700の軍勢で6時間も奮戦したが、結局足利軍に敗れ、正成は弟の楠木正季(まさすえ)らとともに湊川北の民家にこもり自刃した。そして、正成、正季ら28人が自害したその場所がこの碑のある付近だと伝えられてきた。楠木正成・



「楠木正成戦歿地」の碑

正季兄弟は刺し違えて果てるのだったが、その間際、正季が兄正成に「七生まで、ただ同じ人間に生まれて、朝敵をほろぼしたい」と言った『太平記』のくだりは有名で、「七度生まれて君が代を まもるといいし楠公の いしぶみ高き湊川 流れて世々の人ぞ知る」と鉄道唱歌64番の歌詞にもなっている。

◆大楠公墓碑(湊川神社境内)

湊川の戦いで自刃した楠木正成の塚と言われた小さな塚が、もともとはこのあたりの田畑の中にあった。江戸時代に入り、自領内に大楠公の塚があることを知った尼崎藩主青山幸利は、そこに梅と松を植え、五輪塔を建立し、大楠公の墓標にしたのであった。その後、この墓標を管理していた、楠木正成の熱烈なファンである広厳寺の千巖はそれ以上の立派な墓を建てられないものかと思案していた。そうしたところ、水戸藩主徳川光圀(水戸黄門として知られている)に大楠公の建碑の意志のあることを知り、千巖は江戸の水戸藩邸に出向き藩士の鶴飼金平(うかいきんぺい)に書を呈し、光圀に対し建碑の請願を行なうのであった。もともと光圀は朱子学を重んじ、自ら編纂した『大日本史』で南朝正統理論をとり後醍醐天皇を正統の天皇と認め、それに殉じた楠木正成を大

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

湊川神社 多聞通3丁目

いに評価していた。そうしたこともあって、光圀は千巖の請願をこころよく了解し、大楠公建碑の着手にかかったのである。1692（元禄5）年、光圀は家臣の佐々宗淳（介三郎）を兵庫湊川に派遣し、建碑工事の指揮にあたらせた。なお、この時工事にあたった石工（いしく）に住吉村（現東灘区）の権三郎の名が見られる。同年墓碑は完成し、碑の表には「嗚呼忠臣楠子之墓」の八文字が刻まれた。この字は光圀自らが謹書したもので、中国の「嗚呼有吾延陵季子之墓」にならったものである。そして、碑の裏には光圀の師・朱舜水が撰んだ大楠公賛美の文を刻んでいる。また、この墓石は亀の胴体から龍の首が出ているものの上にのせられているが、この形態を「螭首亀趺（ちしゅきふ）」と呼び、朱子学を志した者の墓の型式である。現在、国の史跡に指定されている。なお、墓碑の横に平櫛田中（ひらくしでんちゅう）作の徳川光圀の銅像が建てられているが、これは1955（昭和30）年に建てられたもので、水戸家に残る資料をもとに身長（五尺四寸<163.3cm>）から持ち物まで実寸で造られている。ちなみに、光圀はこの湊川の地には一度も訪れたことがない。



大楠公墓碑



徳川光圀像

兵庫県里程元標 相生町1丁目

元町商店街を出たきさら広場にある高さ約3 ㍎の石柱が「兵庫県里程元標」である。大阪府、兵庫県、鳥取県、岡山県界や明石標柱までの里程が刻まれている。1910（明治43）年に相生橋の西詰めに建てられたものである。相生橋は明治のはじめ、神戸・大阪間に鉄道が走ったときに、神戸駅のすぐ東、元町通から多聞通へ行く道は鉄道で分断されることになった。そこで、その鉄道をまたぐ木造の橋をつくることになり、その橋を相生橋と呼んだ。「川がないのに橋がある」とうたわれ、橋の上から走る陸蒸気（汽車）を眺めることが出来る、神戸の名所となった。1931（昭和6）年、鉄道が高架となり、この橋もなくなり、その脇にあった里程元標も湊川神社前に移され、2004（平成16）年3月にこの場所に移設されたのである。



場所：神戸市中央区相生町1丁目1

●「相生町（あいおいちょう）」の由来

相生とは一般に、同時に生まれ同時に育つとか、一つの根元から二本の枝が出るという意味があるという。高砂の相生の松のようにめでたいことに使われる言葉として知られている。ここの相生町がどこからつけられたのかははっきりとしないが、一説にはめでたい言葉として用いられる高砂の相生の松をとったとも、また、西国街道から有馬へ行く道がここから分かれていたので相生とつけたとも言われる。

●「中町通（なかまちどおり）」の由来

兵庫の町と神戸の町の間で仲町というようになったとか、多聞通と西国街道の間にあるので仲町と呼ぶようになったといわれている。いつの頃からか、仲町が中町となった。

●「古湊通（こみなとどおり）」の由来

一説には、昔はこのあたりは入江で古い港があったことから付けられたといわれているが定かではない。

ハーバーランド 東川崎町

●「東川崎町」の由来



ハーバーランドは1985（昭和60）年に着工され、1992（平成4）年に街びらきが行われた。旧国鉄湊川貨物駅の跡地を利用し、面積約23 ㉩の新たな街で、神戸市がインナーシティ再生、産業の高度化やソフト化など産業構造の変化に対応する担い手として、また、市民生活の多様化・個性化に対応した新しい形の商業・文化施設等の整備、ウォーターフロントの再生めざして建設をはじめたものである。情報文化施設（高度情報センターなど）・商業業務施設（百貨店、ホテルなど）・福祉教育施設（小学校、盲学校、総合教育センター、こべっこランド）・業務施設・住宅施設に分かれ、就業人口約15,000人、居住人口約3,000人計画で街づくりが進められた。

ところで、ハーバーランド一帯は「東川崎町」と呼ばれている。川崎とは河口の海に突き出た所を指し、このあたりは旧湊川の川崎の東側であったから「東川崎」と名付けられた。後年（1886年）、この地にたまたま川崎正蔵が川崎造船所（現・川崎重工）を造ったため、人名の川崎と元からの地名の川崎が偶然にも一致することになったのである。

場所：神戸市中央区東川崎町

◆「明治天皇御用邸跡」の碑(a)

●「弁天町（べんてんちょう）」の由来

宇治川の河口付近を弁天町というが、これはかつてこのあたりに弁財天（市杵島姫命



(a)

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

ハーバーランド 東川崎町

(いちしまひめのみこと) をまつる巖島(いつくしま)神社があったことから名付けられたものである(巖島神社の項参照)。宇治川をはさんで弁天町の西側には幕末に長州藩の御用達を勤めた専崎弥五平(せんざきやごへい)(屋号を鉄屋)の屋敷があった。この屋敷は西南戦争の時、明治政府の運輸事務所となり、その後、1880(明治13)年から1885(明治18)年までは行在所(あんざいしょ)として使われ、1886(明治19)年からは明治天皇の御用邸として用いられるようになったのである。明治天皇をはじめ、皇太子(後の大正天皇)など多くの皇族が利用された。現在、ハーバーランド・ダイヤパーキングの前に、三菱倉庫株式会社が1924(大正13)年9月に建てた、「史蹟 明治天皇御用邸跡」の碑がある。

◆旧新港第五突堤信号所(b)

この信号所は1921(大正10)年に建設されたもので、完成当初は新港第四突堤にあった。神戸港に入港する船舶に対する信号所として設置されたもので、高さが46.3mある。1937(昭和12)年には新港第五突堤に移設され、1990(平成2)年までその役目を果たしてきた。役目を終えた二年後の1992(平成4)年に保存のため、ハーバーランドの現在地に移された。



(b)

◆八時間労働発祥地之碑(c)



(c)

日本での八時間労働制は1919(大正8)年に、川崎造船所(現川崎重工業神戸工場)で採用されたのが初めてである。当時の川崎造船所の社長は松方コレクションで知られる松方幸次郎で、彼はヨーロッパ外遊の経験を生かした先進的な経営者として名高く、当時十時間労働が当たり前だった日本で、八時間労働が世界の趨勢と判断して、それに踏み切ったのである。この松方の試みは、結果として八時間労働制を日本の基幹産業に浸透させるきっかけをつくったと評価されている。こうした、わが国初の八時間労働制発祥地を記念して、造船所に近いハーバーランドに、1993(平成5)年10月、彫刻家井上武吉制作の「八時間労働発祥地之碑」が兵庫労働基準連合会によって建てられた。

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著